



Japan Society of Civil Engineers

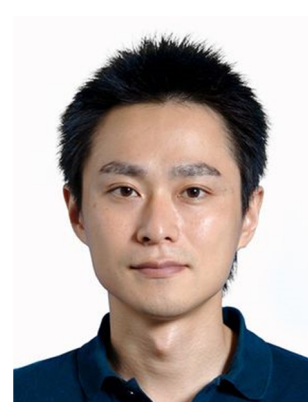
International Activities Center

国際センター通信 (No. 77)

第 6 回留学生向け企業説明会 (東京) の開催報告

国際センター留学生グループでは、日本で学ぶ留学生に日本の土木関係の企業を知ってもらうことを目的に、2018 年 11 月 17 日(土)に留学生向け企業説明会を土木学会(東京)にて開催した。関東圏での開催は今年で 6 回目となる。企業 7 社のご協力をいただき、プレゼンテーション、企業ブースによる個別説明、またパンフレットの配布も行った。参加留学生は 32 名で、関東圏に加えて東北など遠方からの参加もあった。

【参加企業】大日本土木(株)、(株)エイト日本技術開発、日本工営(株)、片平エンジニアリング・インターナショナル、戸田建設(株)、(株)大林組、(株)安藤・間



長井 宏平 (東京大学)

本説明会は 3 部構成で、セッションは全て英語で実施された。第 1 部では、国際センター・留学生グループの活動紹介に続き、特別講演として国際協力機構(JICA)社会基盤・平和構築部の金縄知樹氏より JICA の国際的な幅広い取り組みについて、特に道路分野での活動を中心に紹介いただいた。また、元留学生で清水建設に勤める Neupane Chandra Ram 氏より、これまでの業務の内容や、日本企業に務めることについての経験をお話いただいた。日本のアジア、アフリカを中心とした幅広い国際活動を知ってもらうとともに、実際に元留学生の話聞くことで、参加者にとってより具体的に日本で働くことをイメージできる機会となった。第 2 部では各企業から 10 分ずつの企業説明があり、企業の特徴、海外プロジェクトや業務内容についての情報が提供された。近年は日本での留学経験を持つ中堅・若手の外国人スタッフが登壇する機会も増えており、多様な視点から企業情報が提供されている。第 3 部では企業別のブースセッションを開催した。参加者は複数の企業ブースを活発に訪問し、情報を収集する熱心な姿が見られた。国際経験豊かな日本人スタッフによる丁寧な説明に加えて、本企業説明会に参加した経験のあ



金縄知樹氏による JICA の紹介



企業ブースにて質問をする留学生

る外国人スタッフの親身な対応が印象的であった。

参加者とのコミュニケーションを通じて、留学生の参加目的も多様化していることが感じられた。日本企業の現況や海外事業等に関する知見を広げるために参加する学生、将来的に日本企業で活躍する機会の獲得を目指す学生、卒業後の数年間に就業経験を積み、自国でその経験とノウハウを生かしたいと考えている学生など様々である。こうした幅広いニーズに応えるため、留学生グループでは関東圏のみならず関西圏でも隔年で企業説明会を開催している。今後、継続して留学生と日本企業が情報交換できる場を提供していく所存である。最後に、本企業説明会に多大なご協力を賜った講演者ならびに参加企業の皆様に、この場を借りて感謝の意を表する。

【記：国際センター 留学生グループリーダー 長井 宏平（東京大学）】

衝撃・爆発作用を受ける構造物に関する タイ工学会-土木学会ジョイントセミナー報告 - 構造工学委員会 -

土木学会構造工学委員会とタイ王立工学会(EIT)の共催により、2018年11月2日に「EIT - JSCE Joint Seminar on Structures under impact and blast loadings」をバンコクの近郊にあるインパクト・ムアントーンターニー・エキシビジョン・アンド・コンベンションセンターで開催した。また、本ジョイントセミナーは11月1日～3日に開催されたタイ王立工学会の年次大会の1企画としても位置付けられた。

日本側からは土木学会構造工学委員会の園田佳巨教授(九州大学)、藤掛一典教授(防衛大学校)をはじめとして岸 徳光教授(室蘭工業大学)、枅谷浩教授(金沢大学)の4名が講師として参加した。タイ側からの講師は、Piti Sukontasukkul(キングモンクット工科大学北バンコック校)、Amornthep Somraj 博士(タイ王国陸軍士官学校)の2名であった。

これまで、車両、船舶あるいは航空機等の構造物への衝突に代表される衝撃荷重は、その発生確率が極めて低いということでタイではあまり関心が払われてこなかった。しかしながら、近年では地球温暖化に起因した異常気象現象はタイにおいても深刻になりつつあり、熱低性低気圧による強風災害、あるいは洪水や土砂災害の発生頻度や規模が増加している。これらの災害では、構造物に衝撃的な荷重が作用することも少なくないことから、衝撃荷重に対する構造設計や安全性の確保に関する興味がタイにおいても高まってきている。一方、我が国においては、土木学会構造工学委員会の中に衝撃・爆発問題に関する小委員会を配置し、約 30



講師陣の記念写真（向かって右側から Piti Sukontasukkul 教授、園田佳巨教授、岸 徳光教授、枅谷 浩教授、藤掛一典教授、小室雅人准教授）



講演を行う園田教授

年にわたる活動を行ってきた。そこで本ジョイントセミナーでは、これまでに得られた衝撃・爆発問題に関する知見をタイの方々に情報提供することを第一の目的とした。

表-1 に本ジョイントセミナーのプログラムを示す。本ジョイントセミナーは、タイ王立工学会長 Dr. Thanes Veerasiri の歓迎の挨拶、引き続き日本側の講師を代表して藤掛教授から開会の挨拶があり 6 名の講師による講演が行われた。Sukontasukkul 教授からは『繊維補強コンクリートと天然ゴムシートからなる多層耐弾システム』について、藤掛教授からは『衝撃荷重を受ける超高性能コンクリート』について、枅谷教授からは『落石防護構造物』について、岸教授からは『RC 梁の衝撃載荷試験』について、園田教授からは『衝撃荷重解析』について、Somraj 博士からは『RC 梁の動的せん断破壊』について、それぞれ講演があった。本ジョイントセミナーには約 50 名を超える方々に参加を頂き、衝撃や爆発荷重を受ける構造物の応答や設計法等に特に興味を持って頂くとともに理解を深めて頂くことができた。ジョイントセミナーの参加者からは、来年も開催してほしいという要望も出された。さらに、セミナー終了後には、晩餐会という打ち解けた雰囲気の中で参加者との交流を深めることができたことは最大の成果である。

表-1 本ジョイントセミナーのプログラム

14:00～14:10	Welcome address by EIT President	EIT President Dr. Thanes Veerasiri
14:10～14:20	Opening remarks	Prof. Kazunori Fujikake
14:20～14:40	“Multilayer bulletproof system from FRC and natural rubber sheet”	Prof. Piti Sukontasukkul
14:40～15:00	“Ultra-high performance concrete under impact loading”	Prof. Kazunori Fujikake
15:00～15:20	“Rock fall protection structure”	Hiroshi Masuya
15:20～15:40	“Impact loading tests for RC beams”	Prof. Norimitsu Kishi
15:40～16:00	Closing remarks	Prof. Yoshimi Sonoda
16:00～16:20	“Shear failure of RC beams under dynamic loading”	Dr. Amornthep Somraj
16:20～16:30	Closing remarks	Piti Sukontasukkul
18:30～20:30	Banquet	

また、今回の出張ではジョイントセミナーに加えて、ラマ 7 世橋のアプローチデッキの CFRP 補強工事、あるいは MRT Orange Line の地下鉄工事の現場見学も行い、タイの土木技術レベルを知れたことも成果の一つといえる。

最後に、本ジョイントセミナーの開催に際しては、多くの方々のご支援を頂いた。特に、キングモンクット工科大学北バンコック校の Piti Sukontasukkul 教授のご尽力に心より感謝申し上げる次第である。また、本ジョイントセミナーは公益信託土木学会学術交流基金による助成を受け実施されたものである。ここに記して謝意を表する次第である。

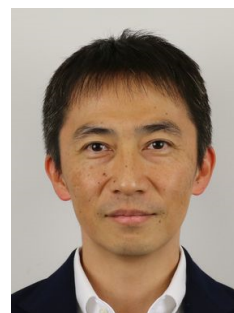


MRT Orange Line の MRTA 駅の工事現場見学

【記：構造工学委員会 藤掛 一典 (防衛大学校)】

土木史研究委員会の紹介

土木史研究委員会は、『日本土木史－昭和 16 年～昭和 40 年－』の編纂を契機として、1973(昭和 48)年に土木学会の常設委員会として設立されました。委員会設立から 8 年後の 1981(昭和 56)年 6 月、土木史研究の発表・討論の場として「第 1 回 土木史研究発表会」を開催し、以来、土木史研究発表会は毎年 6 月の定例行事として、今年で 39 回目を迎えます。設立当初、土木史研究委員会は「日本土木史研究委員会」と称していましたが、1989(平成元)年に現在の「土木史研究委員会」に改称し、研究発表会も「日本土木史研究発表会」から「土木史研究発表会」へと改称しました。



阿部 貴弘 (土木史研究委員会幹事長)

およそ半世紀の歴史を誇る土木史研究委員会の主な活動を概観してみると、

1970～80 年代の黎明期を経て、1990～2000 年代には、いわゆる近代土木遺産の価値評価が最大の関心事となりました。この時期、文化庁をはじめとする行政機関等とも連携を図りながら、価値評価のための多様な方法論が議論され、また評価対象施設も橋梁をはじめ、ダムや水閘門、砂防施設、さらにトンネルや鉄道施設といった、様々な土木施設へと展開しました。価値評価の延長として、土木遺産の保全・活用に関する考え方や手法についても議論が及び、こうした成果は、『日本の近代土木遺産』(土木学会土木史研究委員会編、土木学会、2001、2006)や『歴史的土木構造物の保全』(土木学会歴史的構造物保全技術連合小委員会編、鹿島出版会、2010)等にまとめられました。これらの書籍は、現在でも実務の現場などで活用されています。2010 年代に入ると、「景観法」(2004)や「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」(2008)の制定を背景に、歴史的土木施設をまちづくりの資源として活用する「歴史まちづくり」の議論も活発化しています。



戦後の土木施設である首都高速道路 (日本橋)

土木構造物の保全』(土木学会歴史的構造物保全技術連合小委員会編、鹿島出版会、2010)等にまとめられました。これらの書籍は、現在でも実務の現場などで活用されています。2010 年代に入ると、「景観法」(2004)や「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」(2008)の制定を背景に、歴史的土木施設をまちづくりの資源として活用する「歴史まちづくり」の議論も活発化しています。

さて、2020 年代を目前に、次の半世紀に向けた土木史研究委員会の活動を 3 つほど紹介しておき

ましょう。

まず、土木史研究委員会は今年、「土木史委員会」に名称を変更します。これまで土木史研究委員会は、土木分野における歴史研究手法の確立と、史実としての研究成果の蓄積と活用、土木遺産の評価軸と評価データの構築等に取り組んできました。今後、これまでに蓄積された史実や歴史的技術の体系化、さらにそれらの広範な普及に取り組むとともに、引き続き分野横断的連携の要としての役割も担っていくことから、これらの活動を包括的に表現するため、委員会名称を「土木史委員会」に変更します。

次に、戦後土木施設の歴史的・文化的価値評価の取り組みです。第二次世界大戦の終戦から 70 年を経て、戦後から高度経済成長期に建設された大量の土木施設が更新の時期を迎えるなか、それらの施設は、歴史・文化的価値が評価されることの無いまま撤去されたり、あるいは供用中の施設においてはその歴史・文化的価値に無配慮な改修が行われたりするといった課題も顕在化しつつあります。そこで、土木史研究委員会では、2014(平成 26)年 6 月に「戦後土木施設の歴史・文化的価値に関する調査小委員会」を組織し、分野別の戦後小史の取りまとめ、価値評価のための評価軸の検討、さらに評価対象とすべき施設のリストアップなどを進めています。

最後に、教育・研究の推進です。土木史研究委員会は、昨年、土木史の初学者に向けて、大学の講義等における教材として活用されることを念頭に、『図説 近代日本土木史』(土木学会土木史研究委員会編、鹿島出版会、2018)を刊行しました。本書では、わが国の近代化を支えたビッグプロジェクトを中心に、分野ごとの歴史を豊富な図面・写真・データ・年表類を用いて詳しく解説しています。さらに、本書の刊行を機に「教育・研究推進小委員会」を組織し、土木史教育のさらなる推進とともに、研究の裾野を広げるための活動に取り組んでいます。

いま何を造り、何を遺すかという決断が、未来に生きる子や孫たちの暮らしに影響を及ぼし、そしていまに生きる我々の仕事も、やがて歴史の一頁となります。土木史は、そうした土木技術者としての自覚を促すとともに、土木という仕事の羅針盤となるべく研究分野といえるでしょう。“過去を”学ぶだけでなく、“過去に”学び、いまを評価し、さらに将来を見通すための研究成果を蓄積することが、これからの土木史委員会の使命です。



図説 近代日本土木史

【記：土木史研究委員会 幹事長 阿部 貴弘】

英国分会だより

設計基準の取り扱いに対する日英間での違いについて

日頃英国で土木分野の設計業務に取り組んでいると、日本と英国では設計基準に対する取り扱いの違いは非常に大きいと痛感させられる。筆者の限られた経験から誤解を恐れずに言えれば、日本では設計基準を金科玉条のごとく守る文化があるように思われる。筆者がかつて日本の建設コンサルタントで、やや非標準的な構造物の設計(写真 1 参照)を担当した際に、「道路橋示方書、第何項の解説に示されている式に設計が準じていない。」などと、発注者やメーカーの方などと示方書と設計の齟齬の有無について多く議論をした記憶が思い出される。物事を正しく行おうとする日本人の気質に加えて、会計検査院が設計基準に照らし合わせ設計図面や計算書の細部にまで立ち入って精査するという発注システムが、この日本独自の設計文化を決定づけているように思う。



写真 1 東京都江戸川区に架かる西水門橋

一方、英国では設計基準は日本と同様、設計を行う上で遵守すべきものではあるものの、その運用は日本と比べれば緩いもののように感じる。設計計算や仕様書のベースともいえる設計基準が重要であることには英国でも変わりがない。どこに両国の違い生まれるか？という筆者なりの解釈は以下の通りである。

- ・設計の責任は設計者側コンサルタントとの原則から、設計に瑕疵責任があればコンサルタントがプロフェッショナルインディムニティ(職責補償)と呼ばれる保険を使い補償を行う。設計者側のコンサルタントは発注者の下請けとされる日本と異なり、設計責任を万が一の場合は設計者が補償する前提がある。従って、発注者や施工者も彼らが気になる点を除けば設計が基準に適合しているか否かについて精査しない。
- ・ある程度の規模の構造物の照査は、担当者以外のエンジニアに同じ設計計算を再度実施させ、計算課程を精査せず解のみを比較するという手法がとられる。そのため元設計の計算が基準に整合しているか否かの精査は必ずしも行われない。仮に設計が設計基準を満たしていないとの判断があっても、実際出来上がる構造物に問題がない、ないしは設計基準の規定への順守が不合理な構造物を生み出すなどと考えられれば、設計者と照査者の合意そして顧客の了解のもと成果を修正しないこともある。
- ・オックスフォードやケンブリッジ大学では、設計基準の内容を意図的に教えず、物理学の第一原則から設計や工学上の課題を解決する大学教育が施されている。設計基準の内容より物理学の基本原則を重要視する思想がエンジニアリング課程のエリート教育の根底にある。
- ・ルールを作るのが好きな英国人の性質か、設計に用いられるユーロコード、BS などの基準の数は

非常に多い。その上 Highway England や Network Rail など各機関から出されている設計基準や通達もあり、参照する書類の数はおびただしいものともなる。現実的にいくつかの漏れが、社内、社外の照査を経ても残ってしまうリスクがある。

・プロジェクトの大型化および業際化が進み、マネジメントに重点が移り、必ずしも個々の設計成果に焦点が当たらない。

標準仕様からの逸脱を許しがたい日本式の設計文化では設計の標準化が推し進められ、公共の構造物から欠陥構造物を駆逐しているといえる。国内で戦後供用中の橋が落橋したことがない所以であり、日本の質の高いインフラとして誇るべき点でもある。(ただし過去に多く見られたように、設計基準そのものに欠点があった場合、その欠点が設計技術者によって修正されることがなく、普く広がってしまったことには注意すべきか。) 反面、示方書や基準を逸脱したような設計者独自の思想に基づいた設計が許容されにくい。これは、公共構造物の設計責任が設計コンサルタントではなく発注者側にもあることにも密接にかかわっている。発注者により設計基準に基づいた標準的な仕様が好まれ、また受注者側の観点からも業務を効率化するために開発された示方書や各発注機関の標準仕様に準拠した自動設計計算プログラムが活用され設計基準順守の文化がさらに確固たるものとしている。

一方で、英国流では設計基準が弾力的に運営されているため、設計者が比較的自由に設計を実施し、傑作を生みだすことができる素地もあるといえる。ただすべてのエンジニアが高度な知識を備えかつ高度な技術的な判断を下せるわけではないため、標準的な仕様や基準から逸脱に寛容な文化は、幾重の照査を経てもミスを偶発させる可能性が高い。近年のプロジェクト大型化によるマネジメント重視の潮流に伴う技術力の低下、デザインビルドプロジェクトにおけるデザイナーへの工期や数量縮減などのプレッシャーが、構造物の耐久性や安全上のリスクに繋がる可能性も少なくないといふ肌身で感じている。設計上のクレームや建設業がらみの裁判が多い、建設工期の遅れや高い建設コストなどの問題は、英国式システムの負の側面である。(勿論、日本でも設計ミスの増加が問題となっている点は、忘れてはならないが。)

日本のインフラの海外展開を考えれば、以前からいろいろ所で叫ばれていることではあるが国内での定型化した設計を海外でも当てはめるのではなく、現地の状況に適した設計へとカスタマイズする必要性がでてくる。本邦企業のインフラの設計者には物理学や力学の基本に立ち戻り、設計基準は法律ではないとの視点から設計基準を弾力的に運用し、現地のニーズや状況に合った合理的な設計を実施するとともに、国内で培った安全を担保する確実な設計を海外で実施してもらい、今後のインフラの海外展開に繋げていただきたく思う。

【記：土木学会 英国分会 齊藤 大輔】

【土木学会誌コラボ記事】

土木のアラムナイ ―日本ゆかりの方々とつながるページ―

【ラオス人民民主共和国】

日本の当たり前前^めの生活を発展途上国に広げたい

ローカムサイ チンダー

鹿島建設(株) 土木設計本部 地下空間設計部 シールドグループ 設計員

※アラムナイ (Alumni) は、英語で「同窓生たち」を意味します。

土木そして日本への道

私の出身は、ラオス東北山間盆地にあるサムヌア郡という小さいまちです。私が子供の頃には、まちに電気、水道、ガスはありませんでした。小学校卒業までは、夜の学習は豚脂^{ひき}からつくられるロウソクの明かりに頼っていました。生活用水は井戸からくみ、乾季には水が涸^{かわ}れ、雨季には水が濁り、衛生的な生活とはいえませんでした。まちの中心に流れるナムサム川は雨季のたびに氾濫し、住宅や農地に被害を与えるだけでなく、農作物の価格高騰などを招き、今でも市民の生活を苦しめています。

さまざまな苦労を重ねるうちに、私は皆の生活レベルを上げたい、インフラ開発に貢献したいとの夢が芽生え、土木の道を選びました。

高校を卒業後は、首都ビエンチャンにあるラオス国立大学の土木工学科に入学しました。在学1年目に、先生のお話や教科書などを通して「土木技術なら日本」という印象をもちました。日本は自然災害が多い国だけに自然の厳しさに対抗できる技術・創意工夫がたくさんあるはずと考えたからです。いつしか私は日本の技術を学びたいと願い、留学試験に挑戦し、努力の結果、日本留学が叶いました。



ローカムサイ チンダー
(鹿島建設(株) 土木設計本部)

日本はすごい国

2005年の春に来日し、最初の1年は東京に住みました。東京では個性豊かな摩天楼に圧倒され、あの頃は上ばかりみていました。交通機関は高速道路、鉄道など大変便利で、それを支えるトンネルや橋などが無数にあり、生活インフラでは電気、水道、ガスなどがあり、水道の蛇口からは直接飲めるきれいな水が出る。その上、どこでもそれが当たり前のように使えることに驚き、感動しました。日本は本当にすごい国だと実感しました。

充実した留学生活

私の留学目標は、幅広い土木技術を学ぶとともに、日本社会に溶け込み、和の精神、考え方、道徳を身に付けていくことでした。

東京日本語教育センターで1年間日本語を習得した後、舞鶴高専で土木技術の基礎知識を学び、卒業研究では加登文学先生のもとで土木の基本となる地盤工学分野の研究を行いました。高専卒業後は、さらに高度な専門知識と応用能力の幅を広げるため、九州工業大学に編入し、研究室は耐風工学や構造解析などを扱う構造工学研究室を選びました。学部では木村吉郎先生、修士課程では松田一俊先生のご指導のもと、斜長橋ケーブルや長大吊り橋主塔などの空力振動特性とその制振対策について研究を行いました。研究室ではほかに久保喜延先生、山口栄輝先生、加藤九州男先生によ

り、専門知識以外にも社会の基本ルールや技術者としての心構えなどを熱心に指導していただきました。研究室のメンバーはほとんど日本人学生で、誠実、勤勉、責任感、思いやりがあって、私を仲間として受け入れてくれたことが印象的でした。指導教官や仲間の支えのおかげで、充実した留学生活を送ることができました(写真 1)。

社会に出て世界最先端の土木技術に触れる

2013 年の春に、鹿島建設に入社し、土木設計本部に配属になりました(写真 2)。業務は主にシールドトンネル関連設備の設計で、トンネル覆工、シールドマシン発進到達用の立坑、トンネル付属設備などです。構造物の条件に合わせて解析を行い、安全性と合理性に配慮しつつ、最適な仕様を決める仕事です。これまで、発電所冷却水放水路、下水道、雨水幹線、ガス幹線、道路などのトンネルの設計を担当しました。また、シールド工事現場で、現場監督として職人さんと一緒にものづくりの経験を積むこともできました。日本のシールド技術は、大深度、大断面、地中拡張など世界的にみても難しい工事に次々と挑戦しています。そんな世界最先端の技術に触れることができ、自分は本当に幸運だと感じます。

日本社会からの恩恵

私は日本留学において、日本の文部科学省の国費外国人留学生奨学金、吉本章治奨学金、ロータリー米山記念奨学金のご支援を受け、学業に励むことができました。学校内外では優しい日本人の方がたに支えられ、有意義な留学生活を送ることができました。日本社会から数えきれないほどの恩恵を受けてきました。現在、私は夢に向かってさらなる成長をしたい気持ちと、少しでも日本社会への恩返しをしたい気持ちで日々努力しています。

将来の展望

私は運良く日本で最先端の土木技術に触れることができましたが、ラオスをはじめ世界には恵まれない人びとがたくさんいます。将来はそんな彼らの生活を助けるため、発展途上国でのインフラ開発に貢献したいと思います。

最後に指導教員である松田一俊先生をはじめ、ご指導くださった先生方、日本の仲間たち、各奨学金団体そしてご支援くださったすべての皆さまに、この場を借りて感謝を申し上げます。

【担当編集委員：石坂 哲宏】

《著者略歴》1985 年ラオス生まれ。2005 年来日。2009 年に舞鶴高専を卒業後、九州工業大学に編入。2011 年に学士号、2013 年に修士号を取得。現在は鹿島建設でシールドトンネルの設計に従事。



写真 1 九州工業大学構造工学研究室（著者は 2 列目右から 3 番目）



写真 2 鹿島建設土木設計本部シールド Gr（著者は、右上から 1 番目）

《コラム》松田 一俊 氏（九州工業大学 教授）



私が 2011 年に九州工業大学に着任したとき、チンダー君は修士課程 1 年生でした。彼の勉学への「ハングリー精神」は、日本人の学生よりも旺盛で、研究への取り組み姿勢は目を見張るものがありました。また、彼は、素直で温厚な性格から研究室の誰からも慕われていました。こんなチンダー君との一番の思い出は、博多でのロータリー米山記念奨学金の会合後、意気投合して 2 人で二次会に行き、帰りの電車内で、お互い相手を信用（？）して寝てしまい、乗り換えるべき戸畑駅を過ぎ門司駅まで行ってしまったことです。

チンダー君には、土木工学を志した頃の初心を忘れずに、世界の舞台で思いっきりインフラの建設に邁進していただきたいと願うばかりです。

CECAR8 開催迫る！！

いよいよ第 8 回アジア土木技術国際会議（Civil Engineering Conference in Asian Region: CECAR8）が 4 月 16 日（火）～19 日（金）に東京・ホテルメトロポリタン池袋にて開催される。オンライン参加登録は 2019 年 3 月 31 日までとなっているため、ぜひお申込みをお願いしたい。

■第 8 回アジア土木技術国際会議（CECAR8）

・テーマ：Resilient Infrastructures in Seamless Asia

・開催期間：2019 年 4 月 16 日（火）～4 月 19 日（金）

・会場：ホテルメトロポリタン池袋

（東京都豊島区西池袋 1-6-1、HP: <https://ikebukuro.metropolitan.jp/>）

・主な行事：

① Plenary Session（基調講演）

② Technical Sessions（論文発表）

③ Buffet Dinner（交流会）

④ Technical Tours（テクニカル・ツアー）

⑤ Booth Exhibit（展示ブース）

・参加申し込み：<http://www.cec8.jp/registration/> からお申込下さい（3 月 31 日まで）

各行事の詳細については CECAR8 HP（<http://www.cec8.jp/>）をご覧ください。

お知らせ

◆道路アセットマネジメントに関する SIP インフラ・土木学会・JICA 技術セミナー

http://committees.jsce.or.jp/opcet_sip/node/12

◆CECAR8 参加登録受付中（オンライン登録申込期限：2019 年 3 月 31 日）

<http://www.cec8.jp/>

◆第 21 回国際ナショナルサマーシンポジウム（国際若手技術者ワークショップ）

<http://www.jsce-int.org/node/592>

- ◆「海外インフラプロジェクトアーカイブス(JSCE ウェブサイト (英語版))」
<http://www.jsce.or.jp/e/archive/>
- ◆ACECC(アジア土木学協会連合協議会) ニュースレター (2019 年 2 月号発行)
<http://www.acecc-world.org/newsletter.html>
- ◆「国際センターだより」 *JSCE ウェブサイト (日本語版) にて毎月更新。
<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/118>
- ◆土木学会誌 2019 年 3 月号 *JSCE ウェブサイト (英語版) に概要を掲載中。
<http://www.jsce-int.org/pub/magazine>

配信申し込み

「国際センター通信」配信申し込みは以下の URL をご参照ください。また、周囲の方に国際センター通信をご紹介いただければ幸いです。

「国際センター通信」配信希望者 登録フォーム

- ・日本語版 : (<http://committees.jsce.or.jp/kokusai/node/31>)
- ・英語版 : (<http://www.jsce-int.org/node/150>)

英語版 Facebook

国際センターの英語版 Facebook です。直近の国際センターの活動について紹介しています。
(<https://www.facebook.com/JSCE.en>)

【ご意見・ご質問】 JSCE IAC: iac-news@jsce.or.jp

本通信をより話題性に富んだ内容にするため、皆様のご意見やコメントをお聞かせください。